
Three title storys

水沢ちぬあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Three title stories

【Nコード】

N0344Q

【作者名】

水沢ちぬあ

【あらすじ】

いわゆる三題話というやつです。他サイトで一年ほど前に、お題を募って書いたものです。希望がありましたら、お題を受け付け、書ける範囲で書き足して行きたいと思っています。青くさいものですが、どうぞ。

【学園・恋・秋】

【学園・恋・秋】

夏休みの間、君や他の子たちと一緒に花火大会に行くはずだったのに、都合の悪かった君だけが一緒に行けなかった。

あの日、「好きです」って、告白するはずだったのに。

二学期が始まって、学校で毎日君に会える。それだけが私の救いだった。席も近くて、頻繁に話もできる。だけど——この想いは、黙っていては伝わらないのに。

残暑もだんだんと薄れ、木々が紅葉しはじめた。校庭のもみじが真っ赤に染まる。胸の中に渦巻く想いは、刻々と増していた。

早く告白して……君の気持ちを知りたい。でも、あせるばかりで、私は一步が踏み出せない。

それでも秋は深さを増していった。そんな時。

音楽室に忘れ物をしてしまった……。帰宅途中に気付いて、急いで学校へ引き返し、音楽室へ駆け込んだ。

君がぱつと振り返る。お互い驚いた顔で、数秒見つめあった。

「あ、わ、私、忘れ物しちゃって」

「あー、そうなんだ。俺もなんだ」

笑い合って、はつとする。二人きりだ……。意識した途端、急に緊張が込み上げた。自分の席に向かう足が、心なしかたどたどしい気がする。見られてる？ どうしよう。顔が燃えるように熱くなった。

一緒に教室を出て、先に歩き出した君の背中を見つめる。今、チャンスだ。ここで伝えたいと思った。伝えなくちゃとあせる気持ちを押し寄せる。伝えなくちゃ、早く引き止めなくちゃ、君が行って

しまう。

「あ、あの！」

振り返った君は驚いた顔をして、「何？」と首を傾げた。締め付けられる胸に、喉から声を絞り出す。

「私、……あなたのことが、ずっとずっと好きでした！」

外は、真っ赤な夕焼けと真っ赤なもみじで、秋の色に染まっていた。

【学園・恋・秋】（後書き）

こんな感じです。

書きながら物語を決めていくのでかなりグダグダだったりする…

【歌・青春時代・海】

【歌・青春時代・海】

放課後の教室から聞こえてくる歌を、僕らは毎日聞いていた。どこまでも透き通っていて、きれいなその声の持ち主は、僕の……いや、僕らの初恋だった。

僕ら二人は小学校からの親友で、いつも行動を共にするほど仲が良かった。きつとこれからも同じ道を歩んで行くような感覚さえあったほどだ。

クラスでも病弱で儂げな彼女は少し浮いていた。話したことなんてあまりなくて、僕らはいつも少し離れたところから眺めているだけ。

しかし、それを壊したのは、親友だった。

「な、一緒に帰らないか？」

歌声の響く放課後、教室に飛び込んで、親友は彼女にそう声をかけた。彼女は戸惑った後ゆっくり頷いて、初めて僕らは三人で一緒に帰った。

少しずつ僕らと彼女の距離は縮まっていた。怖々としていた彼女の表情も笑顔が絶えないようになり、僕らもすっかり打ち解けた。そうやって三人で居るのが当たり前になってしばらくした頃。

病弱な彼女は、とうとう重い病気を患って入院した。僕らは一緒に病院へ行ったけれど、面会は出来なかった。

一週間ほどして、やっと面会が許された。久々に合った彼女は、僕らを見て、少し痩せた頬を緩ませた。儂い雰囲気よりも一層強まったようで、少なからずショックを受けた。

でも、何よりもショックを受けたのは、——彼女はもう歌えない

という事実だった。僕らが会いに来てくれて嬉しいと喜ぶ声は掠れていた。辛いだろくに笑っている彼女に……僕らのほうが辛くなつた。

それからは毎日、病院へ通った。彼女の病気のこと、自身から聞かされた。助かる見込みはほぼゼロだという。日に日に声も聞き取りづくなっていく。

明日消えるとも分らない命のもとへ、僕らは毎日通い詰めた。目に見えて痩せていく彼女は、それでも笑って、僕らの話す話を聞いてくれた。

それから一年。彼女は静かに眠りについた。

僕らは、葬儀の後、海へ向かった。

病床でいつも、彼女が僕らに、たったひとつだけ訴えていたこと。『海に、行ってみたいなあ』

聞き取りづらくなってしまった声で、毎日毎日彼女は呟いた。いつか必ず一緒に行こうと、約束していた。

彼女は最期に、日記帳に言葉を遺していた。そのページを切り取った紙を丁寧に紙飛行機にして飛ばす。

「私はとても幸福な人生を送ることができました。出会ってくれてありがとう。」

大人になった今でも、時々あの紙飛行機を空に探してしまう。

【歌・青春時代・海】（後書き）

これは来たお題を見て、勢いで書きたいことだけ書いたやつです…
かなり修正入って途中からよく分からなくなってしまった…

【友情・思い出・遊園地】

【友情・思い出・遊園地】

高校を卒業して離れ離れになった親友から、久しぶりに電話がきた。

「明日引越すんだ。それで、荷物整理してたら、懐かしいもの見つけちゃって」

楽しそうに話す親友の声は全く変わっていない。学生時代の感覚がよみがえる。

「覚えてる？ 初めて一緒に遊びに行ったときの、」友達のしるし”」

「ああ、あの大ゲンカした時の？ まだ持ってたんだ」

高校一年の夏、私たちは友人四人で遊園地へ出かけた。遊んでいるうちに調子に乗った私がふざけすぎてしまい、この親友と大ゲンカしてしまったのだった。もう六年以上も前の話だけど、鮮明に思い出せる。

親友は驚いた声を上げた。

「まだ持ってたんだって、まさかあんたは持ってたの!？」

「そんなわけないよ、ちゃんと持ってる。私も実家出るときにちゃんと持ってきたんだから」

「なんだ、よかった……まだ持ってるのあたしだけかと思ったよ」

「ごめんごめん、と平謝りする私に親友は、まったくもう、とため息をついた。このやり取りも相変わらずだ。

引き出しの奥から、思い出の品をそつと取り出す。小さなストラップ。二つの輪がくつついた形をしていて、「無限大」を表すのだという。ケンカをして二手に分かれ、頭を冷やしてみても申し訳なさが増し寄せ、私は謝罪の気持ちを入れてこのストラップをプレゼントしようと思ったのだ。彼女の好きそうなものだったから。やっと

のことで合流し、互いに「ごめん」の言葉と共に差し出したのは同じもの。不覚にも彼女の趣味と私の趣味は似ていた。

それが、彼女と私が親友になったきっかけでもある。

この二つの輪に、二人で「いつまでも友達でいよう」と誓った。我ながら、高校生でよくそんな幼稚くさいことをしたものだと思いつ返す。今考えると恥ずかしい。

しかし、そのおかげというのか何なのか、私たちは今でもこうして友達でいる。二人とも、ずいぶん大人になってしまったけれど。

「ねえ、私たち、これからも友達でいられるかな」

無意識に出た言葉だった。電話の向こうの親友へなのか、手の中の小さな輪に向けてなのか分からない。親友は、安心しなよ、と陽気に笑う。

「大丈夫。あんたがあたしの事忘れても、あたしはあんたの友達でいるよ」

……こういう時にこんなにかいいことが言えるのも、私の親友ただ一人。嬉しくて少し泣きそうになって、やっと「ありがとね」と搾り出した。

名残惜しく電話を切った後、手の内の小さな”友達のしるし”を空にかざしてみる。

二つの小さな輪は、私たちをずっとつないでいることを証明するように、一度だけきらりと光った。

【友情・思い出・遊園地】（後書き）

私の親友（って言っているのかは知りませんが…）もよくさらつかつこいいと言います。

これは半ば理想の未来かな。私の。
↑

以上三部が過去に書き上げたものです。感想、評価、アドバイスなどお待ちしてます。ずばつと「ここが駄目」とか言ってくださると光栄ですが、誹謗中傷はご勘弁（-人-）

また……自惚れかもしれませんが、ご希望がありましたら、お題を三つ上げてくださればまた書ける範囲で書きます。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344q/>

Three title storys

2011年1月11日20時39分発行